高槻市文化財年報

平成11年度

Ⅰ 埋蔵文化財の調査 …… 1

1　平成11年度の調査

2　調査の概要

津之江南遺跡の調査　鐘ケ江一朗

前塚古墳の調査　鐘ケ江一朗

安満山古墳群萩之庄支群の調査　宮崎　康雄　冨成　哲也

今城塚古墳第３次規模確認調査　宮崎　康雄

Ⅱ 文化財保護啓発事業 …… 22

Ⅲ 資料紹介 …… 26

今城塚古墳の土壌分析　小西　信夫　高山　隆

Ⅳ 付　論 …… i

宮田・春日神社の絵馬　富井　康夫

２００１年２月

高槻市教育委員会

高槻市文化財年報

平成11年度

Ⅰ 埋蔵文化財の調査

1　平成11年度の調査

平成11年度の土木工事等に伴う埋蔵文化財調査の届出・通知件数は、繰越分を含めて81件を数え、このうち76件について発掘調査を実施した。昨年よりも7件減少しており、過去10年間では平成6年度の72件に次いで平成7年度の76件と並ぶ。 平成4・5・9年度にそれぞれ102件実施していることからすれば、約4分の3程度の水準にあって経済動向を反映していることが明らかである。

届出別にみると、個人住宅の41件が最も多く、社会基盤整備に伴う下水道・道路等の公共工事関連がつづく。共同住宅、駐車場等は前年度並みの水準を維持した。しかし開発面積自体は依然として縮小傾向にある。

遺跡別では、嶋上郡衙跡が19件と群を抜いて過去数年の水準を推移した反面、前年度16件を数えた高槻城跡は2件に減少した。氷室塚古墳や郡家今城遺跡では個人住宅建替えやミニ開発に伴う調査が増加している。このほか神内遺跡では、土地区画整理事業に伴う事前調査が一定の進捗をみた。これと並行して隣接地域では個人住宅の調査を実施し、併せて遺跡の実態に迫る成果を挙げつつある。

それぞれの調査概略については一覧表にまとめた。

表1　平成11年度　届出別調査件数

個人住宅	共同住宅	駐車場・事務所等	造成工事等	道路・水路改修	上下水道整備	その他	計
41	3	6 (1)	8	2	9 (1)	7 (7)	76 (9)

下段(　)内は史跡の現状変更等許可申請に伴う調査、再掲

表2　平成11年度　遺跡別調査件数

遺跡名	件数	遺跡名	件数	遺跡名	件数
嶋上郡衙跡	19	前塚古墳	3	高槻城跡	2
塚原古墳群	2	宮田遺跡	2	悉檀寺跡	2
新池遺跡	2	郡家今城遺跡	7	安満遺跡	2
中城遺跡	3	郡家本町遺跡	1	安満山古墳群	1
富田遺跡	1	津之江南遺跡	2	梶原寺跡	2
氷室遺跡	2	大蔵司遺跡	4	神内遺跡	5
氷室塚古墳	6	宮之川原遺跡	2		
今城塚古墳	4	天神山遺跡	2	合計	76

No.	遺跡名（地区）	所　在　地	届　出　者	用　途	面積（m²）
1	嶋上郡衙跡(1999-A)	郡家新町156-3	蓮池　弘璽	個人住宅	51.45
2	〃(1999-B)	今城町157-16	今田　利範	個人住宅	57.75
3	〃(1999-C)	川西町一丁目954-19	後藤　真二	個人住宅	58.59
4	〃(1999-D)	清福寺町10-2	樋口　喜久男	個人住宅	58.59
5	〃(1999-3)	郡家新町395-1	立川　武司	個人住宅	100.30
6	〃(1999-6)	今城町164-70	今西　昇	個人住宅	67.89
7	〃(1999-1)	清福寺町919-19・20、920-6	安積　和世	個人住宅	79.66
8	〃(1999-E)	郡家新町151-8	山崎　恵之	店舗新築	127.52
9	〃(1999-5)	川西町一丁目1092-12	川口　雄二	個人住宅	78.62
10	〃(1999-2)	郡家新町395-5	内田　敬視	個人住宅	59.62
11	〃(1999-4)	郡家新町395-48、-9の一部	一瀬　史朗	個人住宅	103.02
12	〃(1999-7)	今城町189-6	小林康人・順子	個人住宅	101.23
13	〃(1999-F)	清福寺町960、757の一部	植村　一夫	個人住宅	240.63
14	〃(1999-G)	川西町一丁目959-10・956-8	浅沼　芳男	個人住宅	50.25
15	史跡嶋上郡衙跡(1999-H)	清福寺町982-1	株式会社住友銀行	ガス管埋設	32.50
16	〃(1999-I)	清福寺町	高槻市教育委員会	管理用外柵設置	L=47.5m
17	〃(1999-J)	郡家新町255-1・2、267-1・2・5、760	松下電子工業株式会社	遊戯具設置	14.60
18	〃(1999-K)	郡家新町255-1・2、267-1・2・5、760	松下電子工業株式会社	下水道改修	251.60
19	〃(1999-L)	郡家新町271	下村　喜久治	透水管設置	34.65
20	塚原古墳群(1999-A)	塚原二丁目	高槻市下水道部	公共下水道築造	353.00
21	〃(1999-B)	塚原二丁目61-2・62-12	高槻市建設部	道路拡幅	120.00
22	史跡新池埴輪製作遺跡(99-A)	上土室一丁目1-16	高槻市教育委員会	丸太階段設置	14.40
23	新池遺跡(1999-B)	上土室三丁目703の一部	大弘建設株式会社	新池の護岸・埋立	800.00
24	中城遺跡(1999-1)	昭和台一丁目92-2	谷久美子・沙織	個人住宅	65.63
25	〃(1999-A)	昭和台町二丁目3071他11筆	寺坂　道雄	寺院客殿建替	282.97
26	〃(1999-2)	昭和台町一丁目68-1	篠賀　章	個人住宅	153.10
27	富田遺跡(1999-1)	富田町四丁目2544-2	小谷　剛	個人住宅	291.13
28	氷室遺跡(1999-A)	氷室町二丁目	高槻市下水道部	公共下水道築造	761.20
29	〃(1999-B)	氷室町二丁目	高槻市下水道部	公共下水道築造	897.50
30	氷室塚古墳(1999-1)	氷室町二丁目571-2	山口　進	個人住宅	129.86
31	〃(1999-2)	氷室町二丁目571-4	鵜飼　良一	個人住宅	100.01
32	〃(1999-3)	氷室町二丁目903-9	中徳　光雄	個人住宅	102.02
33	〃(1999-4)	氷室町二丁目571-28	山口　善章	個人住宅	100.05
34	〃(1999-5)	氷室町二丁目571-30	上田　俊之	個人住宅	129.64
35	〃(1999-6)	氷室町二丁目571-27	小崎　正道	個人住宅	100.01
36	今城塚古墳(1999-A)	氷室町一丁目4-12	今井　博	下水道管埋設	100.01
37	〃(1999-B)	氷室町一丁目	高槻市下水道部	公共下水道築造	569.60
38	史跡今城塚古墳(1999-C)	郡家新町702-1・2	高槻市下水道部	仮設事務所	90.00
39	〃(1999-D)	郡家新町665他	高槻市教育委員会	規模確認調査	470.00
40	前塚古墳(1999-A)	岡本町93-4、77-2	明和建設株式会社	露天駐車場	1,250.00
41	〃(1999-B)	岡本町75-1の一部	清見　伴美	個人住宅	436.54
42	〃(1999-C)	岡本町75-1の一部	白倉　美佐子	個人住宅	369.19
43	宮田遺跡(1999-1)	宮田町三丁目26-9	岡田正夫・博子	個人住宅	119.71
44	〃(1999-A)	宮田町二丁目18地先	高槻市下水道部	公共下水道築造	50.00
45	郡家今城遺跡(1999-A)	氷室町一丁目791-4	竹内　幸孝	個人住宅	110.01
46	〃(1999-1)	氷室町一丁目791-5・-6	中島　威彦	個人住宅	233.58
47	〃(1999-2)	氷室町一丁目791-1	五十嵐達也・ツタ	個人住宅	116.00
48	〃(1999-3)	氷室町一丁目781-27	大下　清	個人住宅	101.11
49	〃(1999-B)	氷室町一丁目764-1の一部、763	国土開発株式会社	分譲住宅	415.13
50	〃(1999-C)	氷室町一丁目764-1の一部	大光開発株式会社	分譲住宅	137.81
51	〃(1999-D)	氷室町一丁目781-5	東郷　勉・育子	個人住宅	137.81

表3　平成11年度調査一覧表（1）

担　当	調査期間	調　査　内　容
鐘ケ江	11.3.29	地表下0.9mで黄灰色土の地山を検出。遺構・遺物なし
鐘ケ江	11.4.6	地表下1.8mで黄灰色年度の地山を検出。遺構・遺物なし
高　橋	11.4.12	地表下1.9mで包含層確認、地山に達せず。
鐘ケ江	11.4.27	地表下1.1mまで掘削、地山に達せず
鐘ケ江	11.5.11～5.31	地表下1.55mで黄灰色土の地山を検出。遺構・遺物なし※
難　波	11.7.15	地表下1.75mまで掘削、地山に達せず。遺物なし※
宮　崎	11.9.14	地表下0.85mで黄褐色砂礫の地山を検出。遺構・遺物なし※
難　波	11.10.25	地表下1.0mで青灰色砂質土の地山を検出。遺構・遺物なし
難　波	11.12.1～10	地表下1.0mで包含層0.2～0.45mを検出。地山は黄褐色砂礫※
木　曽	11.12.13～12.15	地表下1.4mで黄灰色粘土の地山を検出。遺構・遺物なし※
難　波	12.1.5～1.19	地表下0.9mで黄灰色土の地山を確認。遺物なし※
難　波	12.1.24	地表下1.15mで黄灰色シルトの地山を検出。遺構・遺物なし※
宮　崎	12.2.8	地表下1.8mで暗黄褐色砂礫の地山を検出。遺構・遺物なし
難　波	12.2.14～2.19	地表下2.4mで黄褐色粘土の地山を検出。遺構・遺物なし
鐘ケ江	11.8.9	史跡現状変更。遺構面に達せず
主　原	12.2.7	史跡現状変更。遺構面に達せず
主　原	11.11.20	史跡現状変更。遺構面に達せず
主　原	12.3.2	史跡現状変更。遺構面に達せず
難　波	12.3.10	史跡現状変更。地表下0.7mに包含層確認、施工は同層に達せず
橋　本	11.6.2～8.4	遺構面不存在。遺構・遺物なし
宮　崎	12.2.10～2.18	塚原A57b号墳の周濠検出。須恵器出土
鐘ケ江	11.3.26	史跡現状変更。遺構面に達せず
森　田	12.2.21	史跡指定地対岸の護岸埋立工事。遺構・遺物なし
難　波	11.8.23	地表下0.2mで包含層0.25mの一部残存。地山は黄褐色土※
難　波	11.9.27	地表下0.8mで柱穴・土坑検出、中世瓦片出土。地山は黄褐色砂礫
難　波	11.11.16～11.19	地表下0.35～0.5mで黄褐色礫土の地山検出。遺構・遺物なし※
難　波	11.11.24～11.30	地表下0.3mで橙褐色礫土の地山検出。近世の土坑・竈検出※
難　波	11.12.1～12.24	遺構面不存在。遺構・遺物なし
難　波	11.12.1～12.24	遺構面不存在。遺構・遺物なし
難　波	11.7.1	地表下1.3mまで掘削し、地山に達せず。遺構・遺物なし※
難　波	11.7.8	地表下1.2mで黄灰色粘土の地山検出。遺構・遺物なし※
難　波	11.7.26～7.30	地表下1.5mで白灰色粘土の地山検出。遺構・遺物なし※
難　波	11.9.20	地表下2.15mまで掘削し、地山に達せず。遺構・遺物なし※
難　波	11.10.1～10.15	地表下2.15mまで掘削し、地山に達せず。遺構・遺物なし※
難　波	11.10.15～10.29	地表下0.8mまで掘削し、地山に達せず。遺構・遺物なし※
高　橋	11.6.23	地表下0.3mで黄褐色粘土の地山検出。遺構・遺物なし
難　波	11.9.13～11.13	地表下1.5～1.7mで地山確認。遺構・遺物なし
橋　本	11.8.10	史跡現状変更。掘削を伴わず
宮　崎	11.10.25～12.10	**本書掲載 p.18**
鐘ケ江	11.8.18～8.30	**本書掲載 p.18**
木　曽	12.1.10	地表下0.8mで周濠底確認。埴輪片出土
木　曽	12.1.10	地表下0.8mで周濠底確認。埴輪片出土
難　波	11.1.25～1.31	地表下0.8mで包含層0.15m確認、土坑検出※
高　橋	11.12.6～12.14	遺構面不存在。遺構・遺物なし。
鐘ケ江	11.4.12	地表下1.9mまで掘削し、地山に達せず。遺構・遺物なし
鐘ケ江	11.6.14～6.22	地表下1.3mで黄灰色粘土の地山検出。遺構・遺物なし※
鐘ケ江	11.7.5～7.6	地表下1.2mで黄灰色粘土の地山検出。遺構・遺物なし※
難　波	11.7.16～7.21	地表下1.0mで包含層0.05m検出。地山は黄灰褐色粘土※
鐘ケ江	11.8.6	近世～近代の瓦工場跡。瓦窯跡・井戸跡確認
鐘ケ江	11.8.6	近世～近代の瓦工場跡。瓦窯跡確認
木　曽	12.2.10～2.29	地表下1.0mで黄灰色粘土の地山確認。遺構・遺物なし

No.	遺跡名（地区）	所　在　地	届　出　者	用　途	面積（m²）
52	郡家本町遺跡(1999-A)	郡家本町1000-26	上田　敬治	個人住宅	214.39
53	津之江南遺跡(1999-A)	津之江北町231-1	斎藤　修・和田昌子	宅地造成	748.00
54	〃(1999-B)	津之江北町224-1	中村　和子	共同住宅	1,176.20
55	大蔵司遺跡(1999-1)	大蔵司二丁目197	古藤　忠嗣	個人住宅	388.18
56	〃(1999-2)	大蔵司三丁目114	門川　啓三	共同住宅	443.64
57	〃(1999-A)	大蔵司三丁目114地先	高槻市下水道部	公共下水道築造	398.00
58	〃(1999-B)	大蔵司二丁目	高槻市下水道部	公共下水道築造	248.60
59	宮之川原遺跡(1999-A)	宮之川原五丁目505-53	武田　直樹	個人住宅	87.27
60	〃(1999-1)	宮之川原五丁目512-5	加藤　亘男	個人住宅	72.82
61	天神山遺跡(1999-A)	天神町一丁目933-18	信栄建設株式会社	宅地造成	1,661.50
62	〃(1999-B)	天神町二丁目10-58・-87	近鉄不動産株式会社	共同住宅	1,845.57
63	高槻城跡(1999-1)	大手町1167-6・-17の一部	芦田　多美三	個人住宅	485.62
64	〃(1999-2)	出丸町1277-18	日高　一美	個人住宅	71.12
65	悉檀寺跡(1999-1)	成合中の町601-1	入江　洋三	個人住宅	243.35
66	〃(1999-A)	成合北の町608	久保千恵子	露天駐車場	565.42
67	安満遺跡(1999-A)	八丁畷町369-9の一部	高槻市建設部	道路改良(擁壁工)	2.50
68	史跡安満遺跡(1999-B)	八丁畷町	高槻市教育委員会	管理用外柵設置	L=87m
69	安満山古墳群(1999-A)	高槻市環境部	高槻市環境部	公園墓地造成	98,880.00
70	梶原寺跡(1999-1)	梶原一丁目277-2・276の一部	西村憲夫・恵子	個人住宅	247.60
71	〃(1999-2)	梶原一丁目369-6・370-3	西谷　芳一	個人住宅	1,170.11
72	神内遺跡(1999-A)	神内二丁目	上牧駅北土地区画整理組合	土地区画整理	2,850.00
73	〃(1999-B)	神内二丁目	上牧駅北土地区画整理組合	土地区画整理	9,750.00
74	〃(1999-A)	神内二丁目78・79・80	聖ホサナ教会	教会増築	34.00
75	〃(1999-1)	神内二丁目33・93-8	南　重軾	個人住宅	75.44
76	〃(1999-2)	上牧北駅前町1218-82・83、175、176	鈴木利彦・義継	個人住宅	187.36

表3　平成11年度調査一覧表（2）

担　当	調査期間	調　査　内　容
難　波	11.9.21～9.30	地表下0.2m以下に包含層3層･計1.1m確認。地山は褐色礫土※
高　橋	11.6.3～6.14	地表下0.2mで黄褐色礫土の地山検出。掘立柱建物･土坑検出
鐘ケ江	11.10.27～12.8	**本書掲載 p.6**
難　波	11.7.22～7.23	地表下0.6mで灰褐色粘土の地山検出。遺構・遺物なし※
木　曽	11.11.1～11.15	地表下0.8mで包含層0.4m検出。地山は青灰色砂礫※
難　波	11.11.4～11.30	地表下0.35mで包含層0.75m確認。須恵器片出土・遺構なし
主　原	12.1.5～2.7	地表下0.5～0.8mで地山確認。遺構・遺物なし
鐘ケ江	11.5.6	地表下2.0mで淡褐色砂質土の地山検出。二次堆積土器片出土。
難　波	11.12.16～12.17	地表下0.9mで包含層2層･計0.8m検出。地山は暗褐色砂礫※
鐘ケ江	11.5.24～5.26	旧地形残存部で包含層0.1m確認。柱穴･弥生土器片･石鏃検出
宮　崎	12.3.6	遺構面削平状況を確認。遺構・遺物なし
鐘ケ江	11.7.12～7.14	地表下1.7mで青灰色礫土の地山検出。遺構・遺物なし※
木　曽	12.1.20～1.21	地表下1.1mで暗黄褐色砂礫の地山検出。遺構・遺物なし
難　波	11.8.5～8.10	地表下0.35mで暗灰褐色礫土の地山検出。遺構・遺物なし※
難　波	11.12.9	地表下0.75～0.95mで暗灰褐色礫土の地山検出。遺構･遺物なし
鐘ケ江	11.7.22	地表下0.75mで黄灰色シルトの地山確認。遺構・遺物なし
主　原	12.2.18	史跡現状変更。遺構面に達せず
冨　成	12.2.10～3.31	**本書掲載 p.12**
難　波	11.11.15～11.19	地表下0.9mで褐色礫混じり粘土の地山検出。遺構・遺物なし※
鐘ケ江	11.12.20～12.22	地表下1.7mで暗灰色礫土の地山検出。直上粗砂層より瓦出土※
橋　本	11.5.6～7.31	縄文後期の土器･サヌカイト剥片出土
高　橋	11.8.1～12.3.31	弥生中期の竪穴住居、方形周溝墓群確認。
高　橋	11.5.13～5.31	地表下1.25mで包含層0.35m検出。白磁片出土。
木　曽	11.11.22	地表下1.7mで黄灰褐色土の地山検出。遺構・遺物なし※
木　曽	11.12.24	地表下1.7mで黄灰褐色土の地山検出。遺構・遺物なし※

遺跡別・調査年月日順に配列。※は高槻市文化財調査概要ＸＸＶ「嶋上遺跡群23」に掲載

2　調査の概要

津之江南遺跡(1999-B)の調査

鐘ケ江　一朗

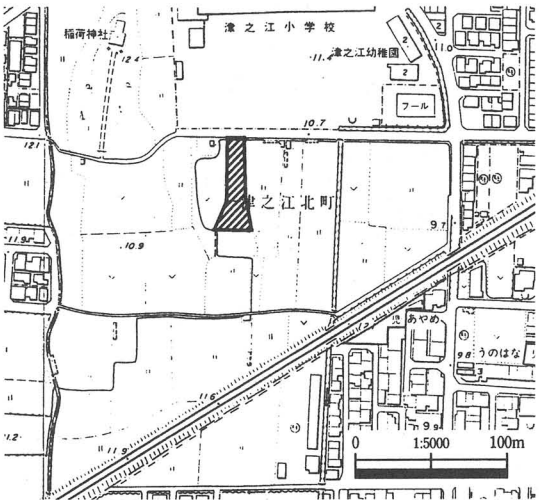


図1　調査位置図

調査地は津之江北町224－1番地にあたり、津之江南遺跡のほぼ中央西寄りに位置する。小字名は垣之内と称する。共同住宅建設に先だって発掘調査を実施した。

調査区は、南半部がほぼ東西14ｍ×南北17ｍ、北半部が東西5ｍ×南北36ｍをはかり全体として撥形を呈する。面積は約400㎡である。基本層序は耕土0.15ｍ、整地土0.3ｍ、暗茶褐色土(遺物包含層)0.05～0.3ｍ、黄褐色粘質土(地山)である。遺構検出面は北から南へゆるやかに傾斜し、標高約9.8ｍ～9.5ｍをはかる。調査の結果、弥生時代及び鎌倉時代の遺構・遺物を検出した。

弥生時代については、後期の竪穴住居跡5棟(住居1～5)のほか、柱穴・土坑・小溝及び東西方向の落ち込み(旧地形)などがある。

竪穴住居跡5棟は、調査区の南寄りから北端にかけて検出した。いずれも隅丸方形の平面形を呈し、住居2をのぞき、北西－南東方向に振って建てられている。ほぼ全形が判明したのは2棟あり、住居1は東西6.4ｍ×南北5.6ｍ、住居4は東西5.4ｍ×南北5.6ｍをはかる。両者は、中央に炉をそなえ、南辺中央に東西0.6ｍ×南北0.4ｍ･深さ0.3ｍほどの長方形土坑を有し、幅0.1～0.2ｍの周壁溝をめぐらせるなど、共通した構造をもつ。住居1･3･4では、それぞれ拡張を伴う建て替えが行われたとみられる。

遺物としては、各遺構及び包含層から弥生土器片が整理箱3箱程度出土している。

鎌倉時代については、調査区中央部で木棺墓1基、掘立柱建物3棟などを検出した。各遺構は暗茶褐色包含層を切り込んでおり、遺構埋土は明灰色粘質土が主体であって弥生時代の遺構埋土とは全く異なる色調を呈していた。

木棺墓は東西1.2ｍ×南北0.5ｍの瓢形で、中央に供献されたとみられる瓦器椀・土師皿が落ち込んでいた。埋積状況から、長さ90cm×幅40cm程度の木棺を伴うものとみられる。

掘立柱建物3棟は、建物方位をほぼ真北にとり、近接して検出された。いずれも調査区外につづいており、全容が判明するものはない。建物1は西端柱列のみ検出した。南北10.2 m(5間)をはかり西側に幅3間の庇がつくとみられる。うち2柱穴に柱根が残存していた。主屋であろう。建物2は東端の柱列を南北4 m(2間)分検出した。建物3は南北4 m(2間)×東西2.2 m(1間)以上、柱間寸法から東西棟とみられる。束柱が木棺墓の 掘形を切っており、墓より新しい時期のものである。以上のほか、調査区北半の包含層からサヌカイト剥片が2点出土している。

津之江南遺跡は、これまでの発掘調査により、旧石器時代から中世に至る大規模な複合遺跡であったことが明らかになっている。当調査区北側の津之江小学校建設時には旧石器時代のキャンプ跡や弥生時代の住居跡が確認され、また東方約50 mの南北水路周辺では、弥生時代後期の住居群や5世紀代の井戸、鎌倉時代の掘立柱建物・井戸などが検出されている。さらに当調査区南西方約80 mでは、弥生時代中期の方形周溝墓群や奈良時代の大規模な掘立柱建物群が検出されるなど、微地形と土地利用の移り変りが判明しつつある。

今回の調査は、本遺跡が北方に所在する嶋上郡衙跡と深く関わった遺跡であるとの知見を補完し、弥生時代後期及び鎌倉時代の住居域が当調査区まで及んでいることなどを明らかにした点が特筆される。

また昨今、継体大王の「港津」としての淀川沿いの「筑紫津」がクローズアップされている(注)。本遺跡の東南側に所在する「筑紫津」神社、北方に位置する今城塚古墳と、本遺跡との関わりが注目され、今後のより一層の調査成果が期される。

注)森田　克行「継体大王の港津－三島の筑紫津」
『あまのともしび』原口正三先生古希記念集
2000年　同集刊行会

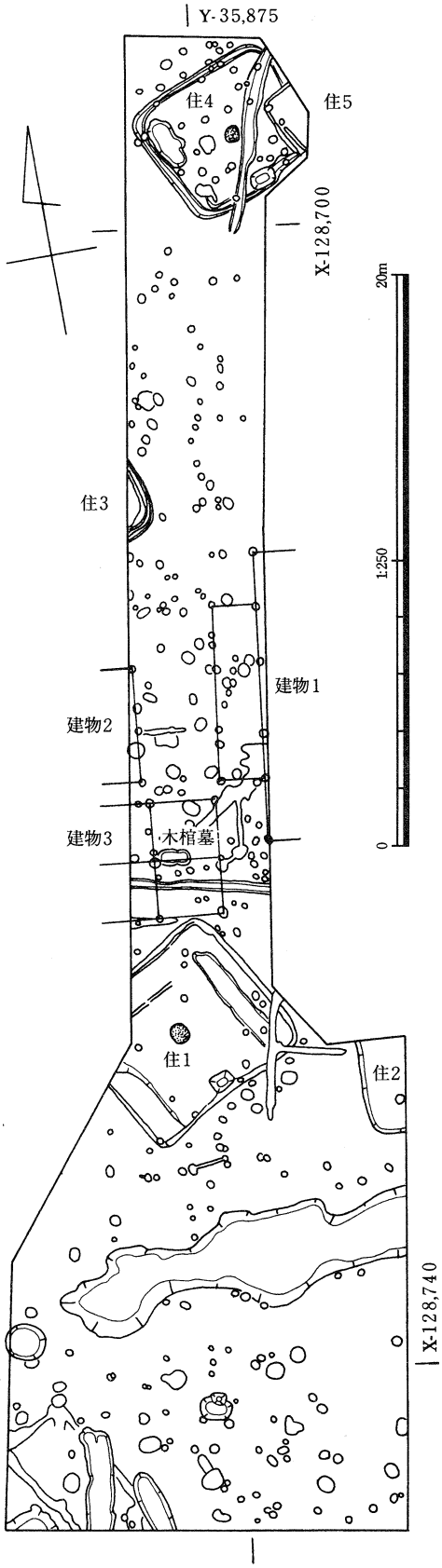


図2　概略平面図

前塚古墳(1999-A)の調査

鐘ケ江　一朗

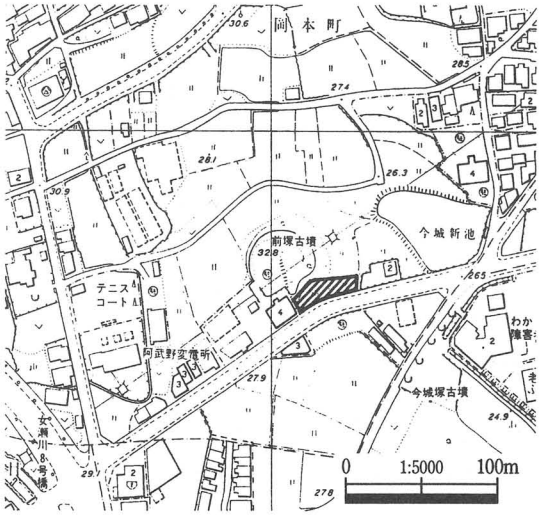


図3　調査位置図

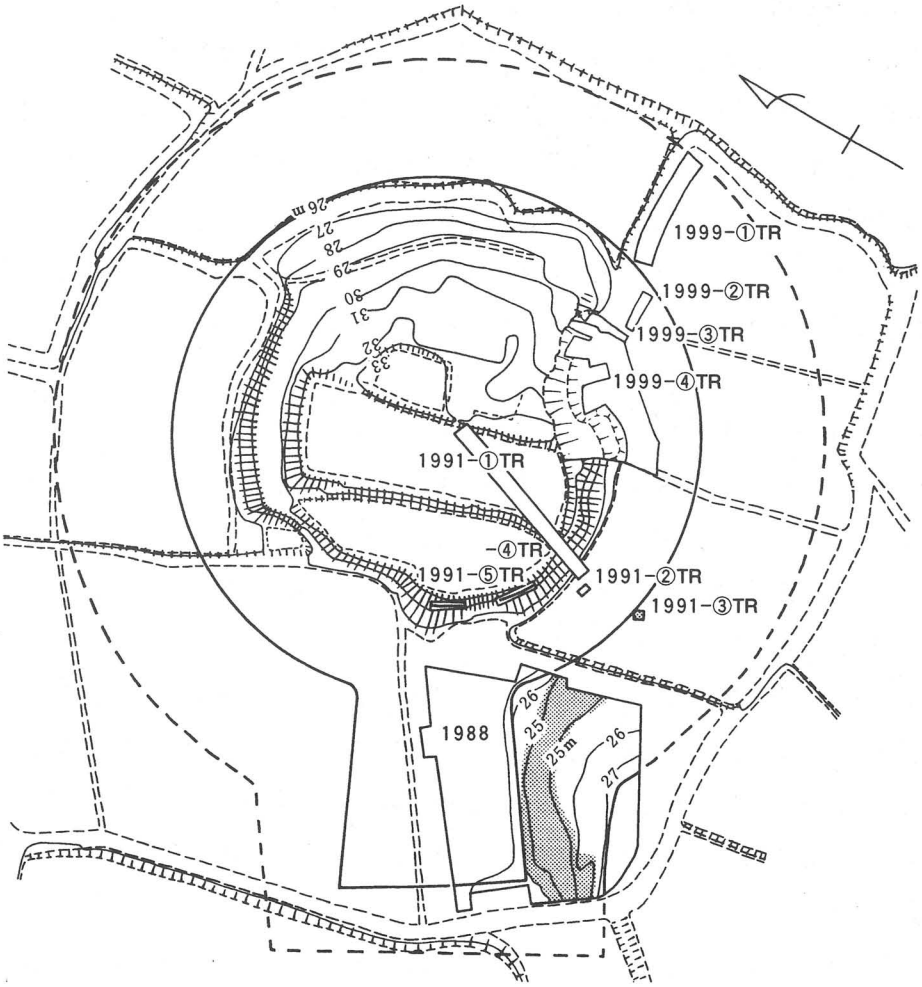
前塚古墳は、史跡今城塚古墳の北西側に位置する５世紀前半頃の帆立貝式古墳である。古墳は西向きに築かれ、全長94ｍ、後円部径69ｍ、前方部長25ｍをはかり、幅10～17ｍの周濠をめぐらしている。明治年間に墳丘部開墾の折、長持形石棺が出土した（長らく大阪府立茨木高等学校にあったが、現在は府立近つ飛鳥博物館に保管されている）。1988・1990年に行われた調査によって、 墳形や規模、 後円部埴輪列・墳丘盛土の状況などが明らかにされている（『嶋上遺跡群15』1991）。

今回の調査地は岡本町93番地にあたり、1991年調査地の南東側に隣接している。小字は塚ノ前である。駐車場建設が計画されたため、事前に調査を実施した。

調査は、周濠及び墳丘盛土の状況を把握するため、東西方向にトレンチを設定して行った。調査の結果、周濠トレンチ１・２では周濠底及び斜面の一部を検出し、転落した葺石や埴輪片が出土した。また旧墳丘部トレンチでは、ほぼ全面で近世～近代の瓦溜まりを検出したほか、墳丘崖面で旧地表と墳丘下部の盛土状況が観察された。

周　濠　　基本層序は耕作土0.2ｍ、茶褐色土0.2ｍ、瓦及び窯体片混じり黄褐色粘土0.3ｍ、黒青色土0.1ｍ(旧耕作土)、灰褐色砂質土0.2ｍ、黄褐色砂質粘土0.05ｍ、淡青灰色砂質粘土0.25ｍ、淡青灰色粘土0.25ｍ、暗灰色粘土0.05ｍ(堆積土)、黄褐色粘土(地山)である。濠底は地表下約1.6ｍにあたり、ほぼ平坦で標高約25ｍを測る。

トレンチ２で検出した墳丘基底部の裾位置は、これまでの調査から復元した位置とほぼ一致する。斜面下半には、暗灰色粘土上の淡青灰色粘土層中に拳倍大のやや扁平なチャート系川原石が多数混入し、摩滅した円筒埴輪片も少量出土した。



（1965年測量の外形実測図をもとに作成。太字は調査年とトレンチ番号）

0　1:1000　50m

図4　古墳平面図

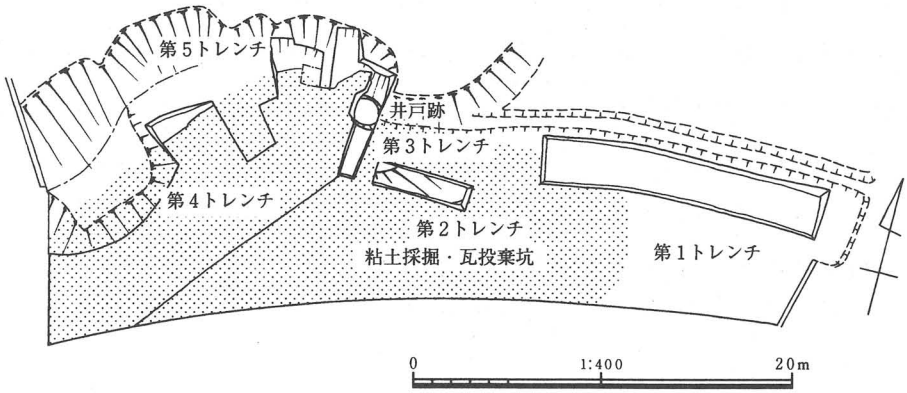


図5　調査区平面図

墳　丘　旧墳丘部では、耕作土直下から厚さ0.5～0.9ｍの瓦混じり土層もしくは瓦溜まりが検出された。墳丘及び地山から瓦の用土を採掘し、屑瓦等を投棄したものである。また崖面裾には墳丘崩落土や投棄瓦が最大約１ｍ堆積し、トレンチ３では同層直下から井戸跡を検出した。瓦はいずれも桟瓦である。崖面の観察では古墳築造時の旧地表は標高27.2ｍ付近にあり、用土採掘に伴う地山削平は約1.2ｍに及んでいる。

崖面の墳丘残存面では、古墳築造当時の旧地表と墳丘盛土の状況が観察された。旧地表面は標高約27.2ｍを測り、上面に厚さ0.5～1cmの炭層が認められた。おそらく草木を伐開後、野焼きしたものだろう。そして墳丘盛土は、旧地表面を整地することなく行われている。旧地表直上0.4～0.6ｍの間は茶褐色～黒褐色系粘質土の小ブロックをていねいに積み上げて鱗状層序を呈し、それより上位は灰白色～黄白色粘質土をそれぞれ0.1～0.3ｍの厚さで積層していた。

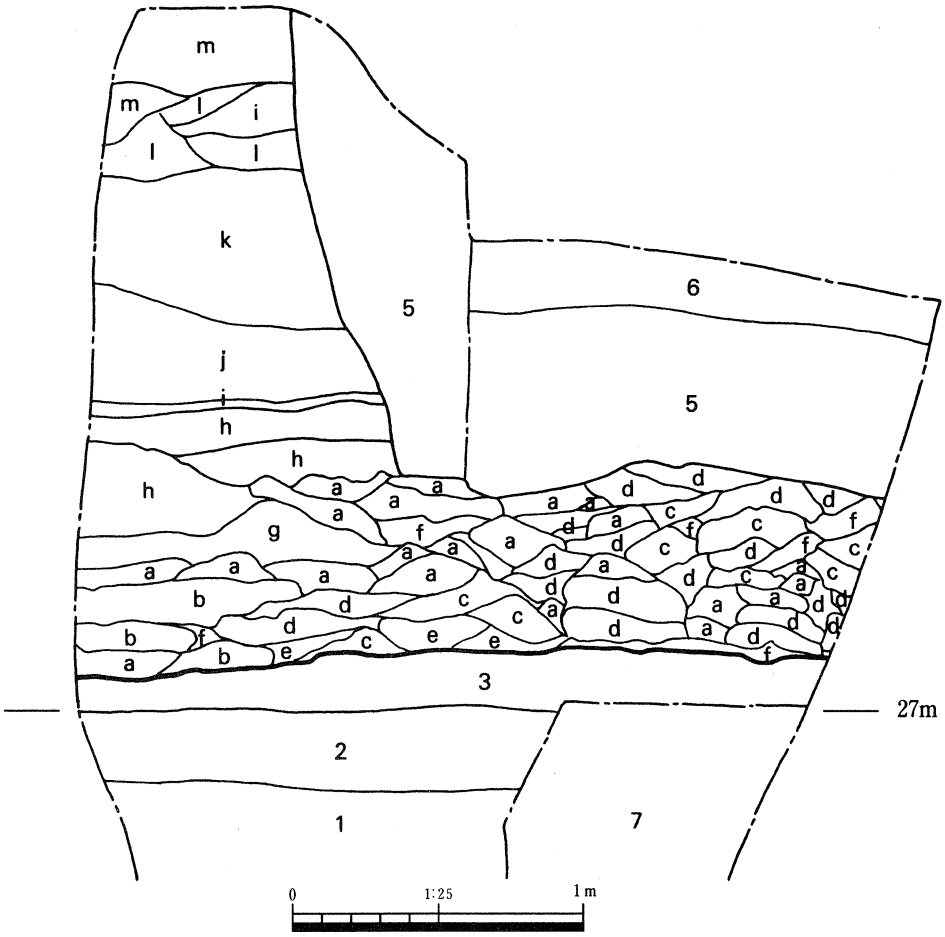
小　結　今回の調査では、後円部周濠について底はほぼ平坦で標高約25ｍにあたることや墳丘盛土工法などが一定明らかになった。

調査地は近世以降この周辺で盛んになった瓦製作に伴う用土採掘のため、かなりの攪乱を受けていた。層序から、墳丘盛土を取り崩して周濠が水田化されたのち、墳丘部で瓦用の粘土採掘がはじまり、採掘坑や周濠部水田を屑瓦等で埋め立てて全体を地上げしていることがうかがわれる。なお1988・1991年調査で検出した自然流路は、今回調査区までは及んでいないと考えられる。

墳丘盛土に関しては、1991年の墳丘トレンチ調査で検出した盛土状況が再確認され、限られた範囲ではあるが、地山とその直上の黒褐色土小ブロックによる鱗状層序を確認できた。墳丘全体の築造過程を面的に追究する手がかりとなる。

なお鱗状盛土を構成する幅0.3～0.5ｍ、厚さ0.1ｍほどの小ブロックは、それぞれが上方から下方へ黄褐色ないし灰褐色から黒褐色へ連続的に移行する色調を呈し、あたかも各ブロックごとに黒色成分が沈降したかのようである。たんに腐食土を含む表土を搬入したものでなく、人為的に用土を調製した可能性も指摘されている（「今城塚古墳の土壌分析」本年報ｐ26）。今城塚古墳や昼神車塚古墳などではこの種の小ブロックを幾層も郭状に盛りながら墳丘下部を築造していると推察されている(注)が、こうした用土の調製や築造工法が三島古墳群においてどこまで遡及するのか、今後の課題となる。

注)冨成　哲也「古墳の墳丘盛土にみるウロコ状層序の覚え書き(Ⅰ)」
『あまのともしび』原口正三先生古希記念集　　2000年　同集刊行会



1. 黄橙色粘土(地山)
2. 黄灰色砂質土(地山)
3. 暗褐色砂質土(地山。上位ほど黒く最上位0.5～1cmは炭混じり黒褐色土。旧地表面に相当)
4. 古墳盛土(a～dは下位→上位と色調が変化している小ブロック)

a. 黒褐色→茶褐色粘質土	f. 黄褐色土	k. 黄褐色土(淡黄灰色粘土粒、小石混じり)
b. 黒褐色→灰褐色粘質土	g. 黄白色粘質土(砂礫混じり)	l. 灰白色粘土
c. 黒褐色→黄褐色粘質土	h. 灰白色粘質土	m. 淡黄灰色土
d. 茶褐色→黄褐色粘質土	i. 黄橙色粘土	
e. 暗黄灰色土	j. 黄白色土(灰白色粘土粒混じり)	

5. 攪乱土(瓦片混じり)
6. 表　土(瓦片混じり)
7. 滑落土(墳丘盛土が塊状で滑り落ちている)

図6　墳丘土層図(第5トレンチ)

安満山古墳群萩之庄支群の調査

宮崎　康雄
冨成　哲也

調査地は高槻市大字下地内にあたり、小字名は水箇峰と称する。現状は山林である。当該地は安満山山塊南斜面の尾根上に位置し、標高は96ｍ～120ｍをはかる。事前踏査の結果、同一尾根上に南北約50ｍをへだてて2基の古墳(南側:Ｂ１号墳、北側:Ｂ２号墳)が存在すると推定された。そのため調査は、公園墓地整備計画を精査のうえ平成11年度はＢ１号墳について発掘調査、Ｂ２号墳について測量調査を実施した。以下、今回の調査概要を記す。なお出土遺物については整理作業の進捗をまって追って報告する予定である。

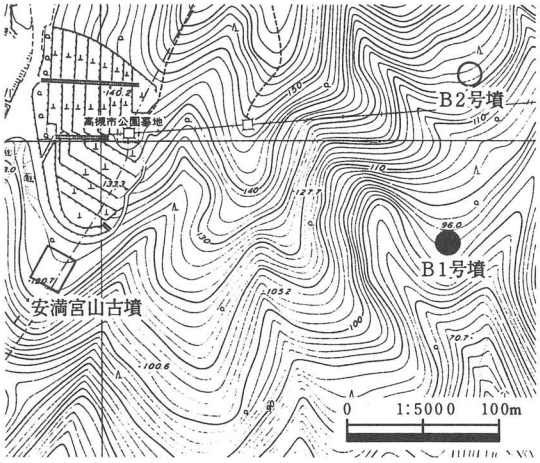


図7　調査位置図

Ｂ１号墳の調査

Ｂ１号墳は、東南方向にのびる尾根の先端に位置する。東･南･西側は深い開析谷につづく急斜面で、北～北東側は北側のＢ２号墳との間に鞍部が形成されている。調査範囲は東西28

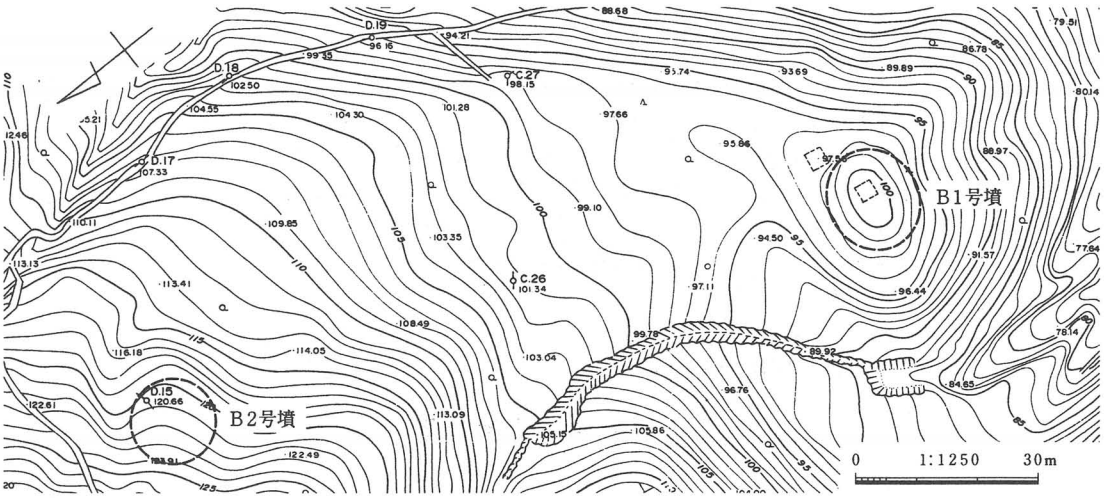


図8　古墳位置図

m×南北20 m、標高は約96 m～100 mをはかる。

調査の結果、Ｂ１号墳の石室掘形から竪穴式の埋葬施設を検出し、粘土郭をそなえた古墳（Ｂ０号墳）の直上にＢ１号墳が築造されていることが判明した。

墳　　丘　東西17 m×南北15 m、現存高2.0 mあって、平面形はやや東西に長い楕円形を呈する。墳丘盛土は大半が流出し、表土0.05 m、黄灰色土(盛土)0.1～0.25 m、以下赤褐色ないし黄褐色礫混じり土の地山である。尾根先端の瘤状の高まりを利用して古墳を築造したものと考えられる。盛土中から弥生土器片が少量出土した。

横穴式石室　左片袖式で現存長5.5 m、玄室長3.15 m、同幅1.9～2.0 m、羨道幅1.35 mをはかる。羨道入口側が流出し、石室上部も崩落しているが、奥壁は最大３段の石が遺存し現存高1.9 mをはかる。石室主軸はＮ-4°-Ｅである。石材には山中に散見されるチャート及び泥岩の転石を用いている

後述するＢ０号墳の墓坑をほぼそっくり掘りあげて構築されており、玄室内は厚さ0.03～0.1 mの客土をほどこしていた。床面には径2～7cmほどの角ばった小石が敷かれ、拳倍大の扁平な割石を用いた棺台が設けられていた。棺は腐朽し遺存していなかったが、鉄釘の出土はなく組合せ式の木棺が用いられたものであろう。

遺　　物　大刀1点(完形、全長116.5cm)・直刀2点・刀子・鏃など鉄製武器多数、銀環2点・水晶製切子玉7点・滑石製小玉22点などの装身具類のほか、蓋杯その他の須恵器32点がある。大刀が玄室奥壁の東寄りに立てかけてあったほかは、すべて玄室床面からの出土である。直刀2点はおのおの東側壁と奥壁に沿わせて置かれ、刀子・鏃などは大半が東側壁ぎわに寄せ置かれていた。銀環・切子玉・小玉は東側の直刀付近から出土した。この直刀は銀製の柄飾りを、また刀子は鹿角製の柄をそなえている。須恵器は、玄室北西隅にひとまとめにして27点、西側壁ぎわに5点が置かれていた。杯蓋11点・杯身13点・高杯1点・壺5点・提瓶2点である。

年 代 等　須恵器は6世紀中頃～後半とやや時期に幅があり、棺台の位置や遺物の出土状況からして、追葬が行われて合計3体が埋葬されたものと推定される。なお遺物は追葬時の原位置を保っているとみられ、天井石の崩落状況等を考え合わせると未盗掘の可能性が高い。

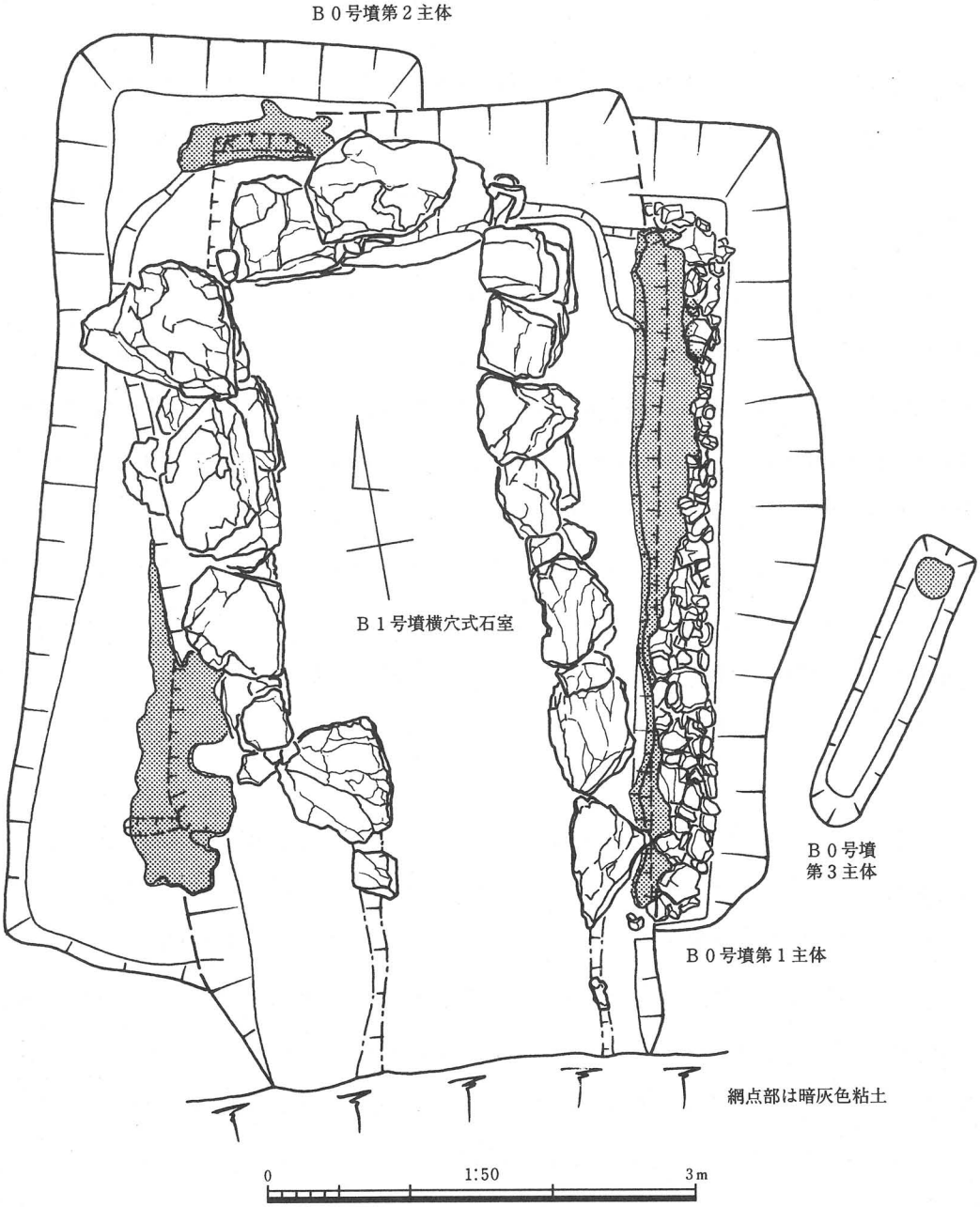


図９　石室平面図

Ｂ０号墳　Ｂ１号墳の横穴式石室の基底部と同レベルで、粘土郭の主体部が東西に並んで2基検出された。東側を第１主体、西側を第２主体とする。いずれも2段掘り墓坑である。並列する2つの墓坑をほぼ踏襲して石室掘形が掘り下げられ、石室基底部と墓坑底がほぼ一致しているため、第１主体の西側約1/2と第２主体の東側約2/3が損なわれている。また墳頂部東寄りで小形の墓坑を検出した。第３主体としておく。なお墳丘面に葺石・埴輪等は確認できず、当初よりかかる外表施設はなかったものと考えられる。

第１主体　上縁長5.7ｍ以上、幅2.4ｍ以上、現存深0.95ｍをはかる。主軸方位はＮ-12°-Ｅである。人頭大の亜角礫を墓坑底周縁に2段ないし3段積み並べた、いわば簡易な礫郭をそなえ、暗灰色粘土を用いた粘土床・被覆粘土が確認された。被覆粘土の上面及び礫郭の上面には赤色顔料が認められた。粘土床の形状から割竹形木棺を納めたものと想定される。

遺物としては、北小口側の墓坑底近くで鎌とヤリガンナ各1点を検出した。

第２主体　上縁長6.7ｍ以上、幅2.5ｍ、現存深0.8ｍをはかる。主軸方位はＮ-14°-Ｅである。粘土郭のみで、やはり上面に赤色顔料が認められた。棺は、長さ4.7ｍ規模の割竹形木棺と考えられる。両小口側に長さ0.4ｍ、幅0.14ｍほどの主軸に直交する掘り込みがあり、棺小口の閉塞施設の可能性がある。

遺物としては北小口側の底近くでヤリガンナ片とみられる鉄製品を1点出土した。

第３主体　2段掘り墓坑で、上縁長2.3ｍ以上、幅0.9ｍ、現存深0.3ｍをはかり、主軸方位はＮ-33°-Ｅである。坑内北側に径0.2ｍの暗灰色粘土塊が認められた。

なお第１～第３主体の先後関係は明確にできなかったが、並置された第１・第２主体では、墳丘のほぼ中央部に位置する第１主体が若干先行するとみられる。

年　代　Ｂ０号墳の時期を限定するに足る資料は得られていないが、墓坑の形状から4世紀代、それも後半期に築造されたものと考えられる。

Ｂ２号墳の調査

今回測量調査を実施し、等高線間隔0.25ｍの現況平面図を作成した。

調査の結果、古墳の規模は東西14ｍ×南北14ｍの円墳と推定された。墳丘高は現状で南側約4ｍをはかる。主体部は横穴式石室である。中央部は陥没しているが、大形の石材が一部露出している。墳丘は良好に遺存しており、Ｂ１号墳の状況に照らしても、石室内部は比較的良好な状態にあるものと推察される。

鞍部の調査

Ｂ１号墳とＢ２号墳の間にひろがる幅25～40ｍの鞍部について、縦横に幅１ｍのトレンチを設定して遺構の有無を精査した。調査の結果、表土下は流出土もしくは地山となり、遺構・遺物ともに認められなかった。

小　結

調査の成果　安満山古墳群萩之庄支群は、安満宮山古墳の東方尾根上に位置する。今回の調査では、粘土郭を主体部とする４世紀代のＢ０号墳と、横穴式石室をそなえた６世紀代のＢ１号墳がまったく重複しているという、珍しい事例が明らかになった。両者は墳丘を共有しており、結果的には粘土郭を破壊して横穴式石室を構築していることになる。

Ｂ０号墳に関する資料は限られており、詳細な内容は明らかでない。しかし築造時期や墳丘規模から先行する安満宮山古墳との関連が注目されるところであり、今後の課題となる。また地形を利用してほとんど盛土をほどこさない築造方法をとっているとみられ、今後の周辺の調査において注意を喚起することになった。

Ｂ１号墳横穴式石室については、長大な大刀や銀装の直刀、鹿角装の刀子など多彩な武器類の出土が特筆される。またＢ０号墳上への石室構築については、墳丘をそのまま利用し主体部の存在にかまわず石室を構築しているところに、地形を利用して適宜に墓所を造営しようという意識がうかがえる。このときまでに、おそらくＢ０号墳の祭祀は断絶していたのだろう。

萩之庄支群の築造　地形から古墳の占地をみると、Ｂ１号墳は標高100ｍ、Ｂ２号墳は同125ｍをはかる。両墳の所在する尾根の東西は、それぞれ深い開析谷をはさんで高い尾根が南へ連なっている。平野側からみれば谷の最奥部にそそりたつ急斜面の頂部にＢ１号墳、その奥にＢ２号墳という構図になる。両墳は鞍部をはさんで約120ｍへだたっており、その間に

は古墳を築いた形跡はみられない。同じ尾根に所在していることからこれら横穴式石室の被葬者の基盤は共通していると考えられるが、両墳の距離は、標高差をかせぐために必要だったのであろう。すなわち両墳の配置は、視覚的効果をねらった結果と考えられ、この場合Ｂ１号墳が先行し、遅れてＢ２号墳がより高い位置に築造された可能性が高い。

今城塚古墳第３次規模確認調査

宮崎　康雄

今城塚古墳は、6世紀前半に築造された淀川北岸で最大級の前方後円墳で、西暦531年に亡くなったとされる継体大王の真の陵墓と考えられている。墳丘は地形を利用して東西方向に築かれ、二重の濠をめぐらせている。「今城」の名は戦国時代に墳丘や濠を利用して砦とされたことに由来し、 そのさいの大規模な改変のために古墳本来の形状は大きく損なわれている。

教育委員会では、平成８年度に測量調査を実施して詳細な平面図を作成、平成９年度から規模確認調査を実施してきた。過去２回の調査では、後円部北側の墳丘及び内濠・内堤の状況が判明したほか、戦国時代の「今城山城」の築城時に大規模な土木工事を組織的に行ったことが明らかになっている。

今回の調査は、後円部南側の墳丘及び内・外濠の遺存状況と後円部の直径を把握するために実施した。

遺　　構

＜古　　墳＞

墳　丘　今回、墳丘部においてはじめて古墳本来の盛土の状況と築造時の旧地表を確認した。旧地表の標高は北側23.8ｍ、南側23.7ｍをはかり、わずかに北から南へ傾斜している。断面の観察から、一旦平坦面を形成してから直接、墳丘盛土をほどこしていると考えられる。盛土は径0.4ｍ、厚さ0.1ｍ前後の小土塊をていねいに積み上げた鱗状層序を呈しており、非常に堅

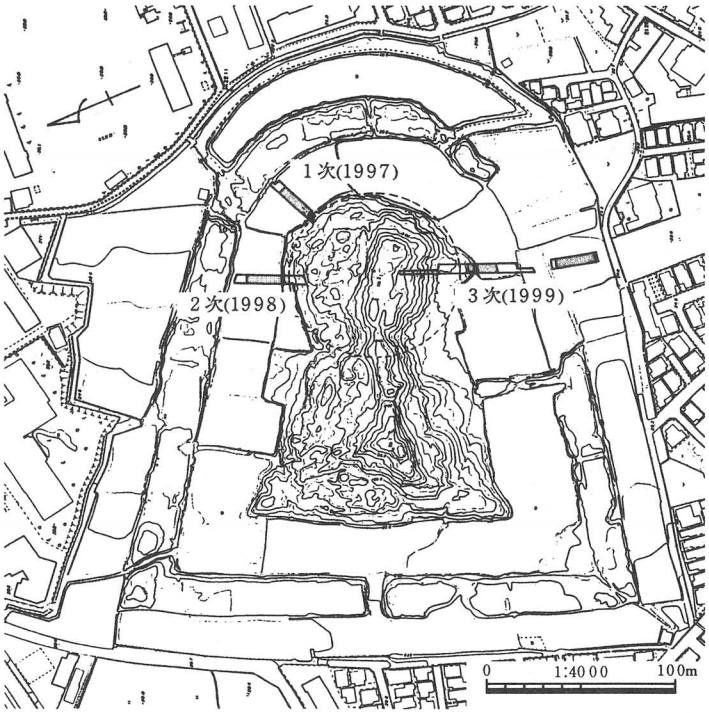


図 10　調査位置図

く締まっている。盛土の下方はおもに黒色土、上方は黄灰色土を意図的に使い分けていた。今回この黒色土の土壌分析を実施したが、人為的に炭化物を混和している可能性が指摘されている（本年報p.26）。

調査区北端では墳丘上で南北3 m、深さ0.6 m程度の落ち込みを検出した。流入土から は細片化した石棺や埴輪片、鏃・小札など鉄製武器・武具類、ガラス小玉が出土した。

内　濠　内濠底を検出し、墳丘側と内堤側の斜面裾を確認した。調査地点が後円部から前方部へ移行する位置にあたるため、濠幅は西側ほど広く、幅5 mのトレンチ内での濠底幅は東側18.4 m、西側19.2 mをはかる。現地表面からの深さは約2.2 m、標高21.5 mをは かり、底はほぼ平坦である。

斜面角度は墳丘側が26度、内堤側が27度で立ち上がった後、葺石面では10度と緩くなっていた。

内濠の層序は、耕作土、埋積土、堆積土(泥土層)、地山となっており、これまでの調査と同じ状況が観察された。厚さ1～1.2 mの堆積土中には円筒埴輪片のほかにドングリ・ヒシ・倒木などが多量に含まれていた。内堤裾付近では濠底で先付杭、堆積土中層から楔状の木製品が、また墳丘側では同層から板材が出土した。

葺　石　葺石は墳丘及び内堤斜面で確認した。人頭大から一抱えもある川原石を据えたもので、墳丘側にはより大きな石材を用いている。墳丘側では裾廻りの石列がゆるやかに弧を描く状況が検出されたが、内堤側は大半が崩落し原位置をとどめていない。崩落した石材の量から判断して墳丘斜面全体に葺かれていたとは考えにくく、内濠両岸の水際をめぐっていたものと思われる。

外　濠　外濠底を検出し、内堤側・外堤側の斜面裾を確認した。 濠は外堤ラインと平行に直線的にのびており、深さは現地表面から0.8 m、濠底幅19.7 m、斜面角度

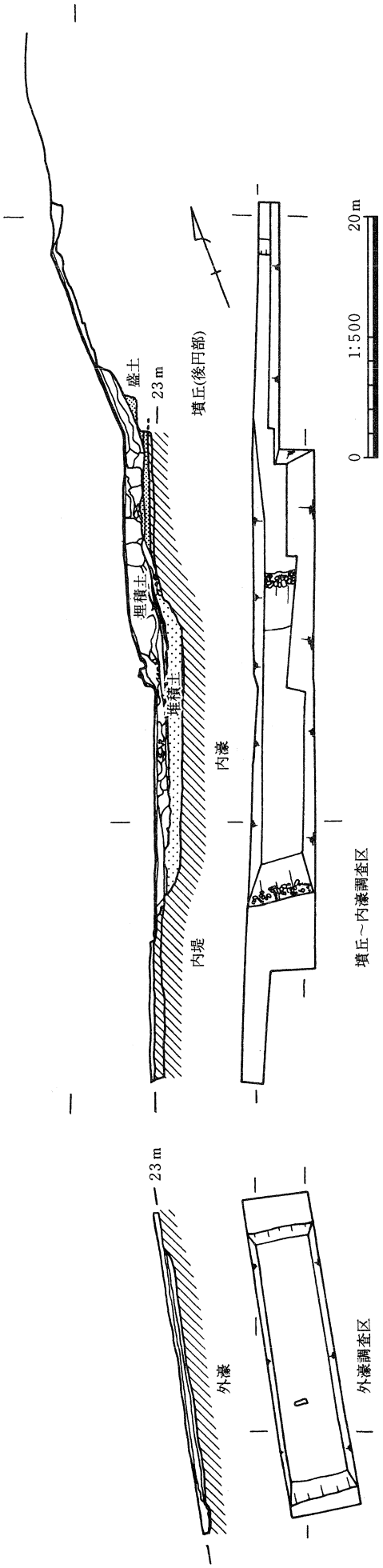


図 11　平面・断面概略図

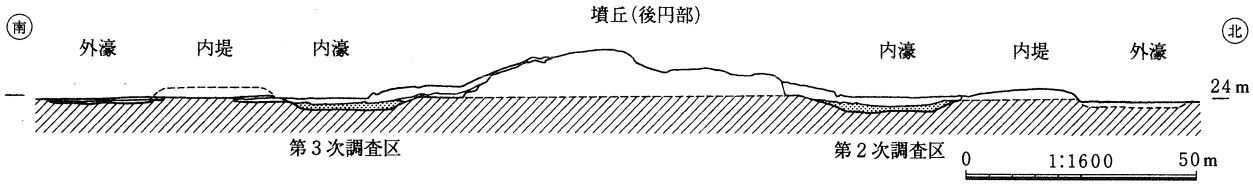


図 12　後円部側南北断面図

は24～25度をはかる。底は平坦である。

層序は耕作土0.1m、埋積土0.4m、堆積土0.3mに大別された。堆積土は内濠の均質な泥土とは異なって多量の粗砂を含んでおり、外濠は当初より空濠だったと推定される。

＜今城山城＞

後円部北側の所見と同様に、墳丘から切り出した一辺2m前後のブロック土を墳丘側から落とし込み、内濠を埋めている状況が観察された。ブロック土は随所に衝撃や重みで割れたり滑落した痕跡をとどめていた。とくに墳丘部では盛土と埋積土の境界面で薄い縞状の土層が見い出され、水を打って一気にブロック土を滑らせたことが想定される。

墳丘裾付近ではブロック土上に整地土が観察され、内濠を一気に埋めたのち整地して郭としていたと考えられるが、建物・柵などの城郭関連遺構は検出しなかった。

遺　物

古墳に関わる遺物としては埴輪、木製品、石棺、鉄製品、ガラス小玉がある。

埴輪は円筒埴輪が大半を占め、わずかに朝顔形埴輪を認めた。ヘラ記号をほどこすものもあるが、今回は本古墳に特徴的な二本マストの船は見出されなかった。

木製品としては内濠から出土した杭と楔状木製品、板材がある。杭は長さ60～100cm、径5cm程度の先付丸太杭である。楔状木製品は3点あり、長さ34～52cm・幅11～15cm・厚さ3～5cmをはかる。用途は不明だが傾斜面はていねいに加工している。板材は長さ183cm・幅25cm・厚さ1.2cmをはかり、釘穴がのこる。杭は古墳築造に用いたものと考えられるが、楔状木製品及び板材については築造後一定期間を経過後に埋没したものとみられる。

石棺材は小片でいずれも二上山白石である。鏃・小札はいずれも破損しており、全形が判るものはない。ガラス小玉は径・厚みとも2～4mm、色は紺・緑・黄などがある。これらは副葬品の一部と考えられる。

城に関わる遺物としては、外濠堆積土の上面から鉄砲玉が出土している。鉛製で直径約1.1cm、重さ約6gをはかり、表面は風化して灰白色を呈している。打撃痕はみられず、実際

に使用したものではないと考えられる。

小　結

過去2回の規模確認調査の結果と併せ、後円部の直径は裾廻りで100mと判明した。内濠については底面の標高、斜面角度など前回までの数値とほぼ同様で、周到な計画のもとに築造されていることがうかがわれる。外濠についてはこれまでも空濠の可能性が指摘されてきたが、今回の調査でそれが裏付けられた。また墳丘部で出土・採集した鉄製品・ガラス小玉類については、主体部損壊の状況をうかがう資料となる。

今城山城については、鉄砲玉の出土をみた。鉄砲が伝来した16世紀中頃以降、高槻へ進出した武将のなかで鉄砲隊を組織していたのはほぼ織田信長に限られる。その意味で永禄十一(1568)年に摂津へ侵攻し三好勢を駆逐した織田信長が、この城を築城した可能性がより高まったといえる。

II 文化財保護啓発事業

1. ハニワづくりとスケッチ・ぬり絵大会

日　　時　平成11年5月29・30日

内　　容　史跡新池ハニワ工場公園において、一人でも多くの方々が文化財に接し理解を深めてもらえるように、親子で参加できる体験型のイベントを実施している。

第5回目にあたる今回、ハニワづくりの部ではハニワをモデルにしつつ自由な着想の、しかも大振りの作品が数多くみられた。スケッチの部ではハニワや工場公園の様子をいきいきと描写した作品が目をひいた。ぬり絵の部は、今回から下絵2種を塗り分けるだけでなく、フキダシにせりふを書き入れ題名をつけてもらうようにした。おなじ下絵でも彩色やせりふ、題名ひとつで違った情景が生み出された。応募作品は厳正な審査を行い、各部門ごとに入賞作品を選んだ。全作品の展示及び賞・記念品の贈呈をジャスコシティ高槻で行い、入賞作品は小さな展覧会会場でも展示した。

協　　賛　ジャスコシティ高槻

参 加 者　672人

作品展示　ジャスコシティ高槻　7月23日～7月27日

小さな展覧会会場　10月6日～10月11日

2. 小さな展覧会

日　　時　平成11年10月6日～10月11日

内　　容　「埋蔵文化財調査センター館蔵品展」として、市内出土資料及び所蔵文化財を精選して展示した。 速報コーナーでは、 高槻城跡キリシタン墓地から出土した木棺とロザリオを展示した。

見 学 者　4,042人

講 演 会　「キトラ古墳と阿武山古墳」（平成11年10月10日）

講　　師　猪熊　兼勝（京都橘女子大学教授）

参 加 者　67人

3. 高槻歴史紀行ウォーク

日　時　　平成11年11月21日

内　容　　史跡等の文化財により親しむ機会を提供するとともに、本市のアイデンティティを市内外に発信、啓発するため、「高槻歴史紀行」と銘打ってスタンプラリーの要素を加味した歴史ウォークを開催した。

平成11年度は、その第1回として平成10年12月に復元整備した安満宮山古墳を軸に、ルート1「安満・青龍三年の丘」を設定した。ルート前半は現在の市街地を形成する契機となった京阪神急行電鉄(現阪急電鉄)と大阪医科大学、京都大学農学部附属摂津農場、後半は安満遺跡から鎮守・磐手杜神社を経て安満宮山古墳にいたる祭祀の道をたどり、　古代から現在に思いを馳せてもらおうというものである。

コース　　スタート阪急高槻市駅→八丁松原→史跡安満遺跡(遺跡解説・スタンプポイント)→磐手杜神社→ゴール安満宮山古墳(遺跡解説・スタンプポイント、ミニ講演会)

講演会　　「発掘川柳『邪馬台国』」(安満宮山古墳現地講演会)

講　師　　酒井　龍一(奈良大学教授)

参加者　　146人

4. 史跡今城塚古墳発掘調査現地説明会

日　時　　平成12年1月23日

参加者　　287人

史跡今城塚古墳第3次規模確認調査の調査成果を市民に公開し、普及啓発を図るため、現地説明会を開催した。

今回の調査は、後円部南側の墳丘～内濠・外濠について実施したもので、後円部直径や外濠の形状など古墳にかかわる新事実にくわえ、戦国時代の鉄砲玉が出土し織田信長方による今城山城築城の可能性が高まった、などの成果を得た。当日は強雨で開催が危ぶまれたが、参加者は熱心に調査現場に見入り、さまざまな質問が相次いで発せられ、古墳に寄せる市民の関心の高さがうかがわれた。

5. 歴史民俗資料館

市指定有形文化財・旧笹井家住宅を移築復元した歴史民俗資料館では、民俗文化財等に関する資料を収集・保存し、その展示や講座を実施した。

企画展示　「伝統産業・寒天づくり」　平成11年2月2日～5月23日
「さまざまな計量具」　平成11年6月1日～10月17日
「うつわにみる食文化」　平成11年10月26日～12年1月23日
「くらしのなかのきかい」　平成12年2月1日～5月28日
講　　座　「歴史文化と元気な子育て」　平成11年10月17日
参加者　親子30組
寄贈民俗文化財　30件

6. 文化財現地公開展

日　時　平成12年3月10日～11日

内　容　文化財に接する機会を設けるため、所有者等の協力を得て実施している。平成11年度は、高槻市上牧町二丁目所在・本澄寺の協力を得て本堂・祖師堂・山門仁王像などを公開した。

またこのさい仁王像2躯について、本市文化財保護審議会委員井上正氏に依頼し、文化財基本調査を実施した。

参加者　347人

7. 平成11年度施設利用状況

施設名	見学者数	利用日
歴史民俗資料館	17,503人	1/4～12/28 (月・祝翌日休み)
埋蔵文化財調査センター	3,944人	1/4～12/28 (土・日・祝休み)
ハニワ工場公園	16,838人	年間(工場館12/29～1/3休み)
安満宮山古墳	13,674人	年間

8. 資料等の刊行

平成10年度に開催した市制55周年記念歴史シンポジウム「検証・邪馬台国」の記録をまとめた『邪馬台国と安満宮山古墳』を吉川弘文館より出版した。また高槻市文化財調査報告書第21冊『安満宮山古墳』－発掘調査・復元整備事業報告書－及び規模確認調査速報『今城塚古墳』－平成10年度－を刊行した。

9. 文化財資料の貸出

文化財の普及啓発を図るため、「発掘された日本列島'99－新発見考古速報」展に高槻城キリシタン墓地出土の二支十字墨書木棺を貸し出すなど、所蔵保管資料・写真記録類の貸出・掲載許可を行った。

51件190点（写真記録類114点、遺物76点）

10. 報告書等の受け入れ

図書交換先関係機関等から調査報告書等2,144冊を受納した。

11. 出土遺物保存処理

市内出土資料の恒久的保存を図るため、木製品・金属製品等の経年変化が著しい遺物について、保存科学的処理を順次委託実施している。これまでに郡家車塚古墳出土の漆塗槍柄や高槻城キリシタン墓地出土の二支十字墨書木棺などを完了、平成11年度は次に掲げる6件の保存処理を実施した。

①嶋上郡衙跡出土の井戸枠（3か年計画の3年目、PEG法）

嶋上郡衙跡の推定「厨」域から1969年出土。一辺2.5ｍ・深さ1.6ｍの方形掘形内に据えられ、湾曲した厚板5枚で全体として内径1.1ｍの井戸枠を構成していた。

②津之江南遺跡出土の柱根（3か年計画の1年目、PEG法）

1998年、律令期の大形建物から2点出土。一辺1ｍの方形掘形内に据えられ、直径40cmを越える市域最大級の規模を有する。

③高槻城キリシタン墓地出土の木棺1基及びロザリオ（高級アルコール法）

1998年出土。この木棺は、重要な信仰用具であるロザリオを副葬しており、戦国時代末期のキリシタンの活動並びに信仰用具の実体を示す貴重な資料である。

④史跡今城塚古墳出土の木製品（高級アルコール法）

史跡今城塚古墳の第2次規模確認調査において、後円部北側内濠の濠底から出土した掛矢・櫂状木製品である。古墳築造時に用いられた土木用具と考えられる。

⑤古曽部・芝谷遺跡出土の鉄製品（アクリル系樹脂強化）

同遺跡芝谷地区から1973年に出土。板状鉄斧、鉄鏃など5点。

⑥塚原古墳群出土の鉄製品（アクリル系樹脂強化）

塚原Ｂ41号墳・Ｄ4号墳・Ｌ4号墳から出土した銀装捩り環頭、金銅装飾金具、留め金具など9点。

Ⅲ 資料紹介

平成11年度に実施した史跡今城塚古墳第3次規模確認調査において、 墳丘構築工法解明の基礎資料とするため、墳丘の鱗状盛土を構成する暗灰色～黒灰色系ブロック土に着目して用土等の土壌定性分析を行った。以下に分析結果報告を紹介する。なお今回割愛した詳細な定性分析値、分析チャート等については埋蔵文化財調査センターで保管しており、参照可能である。

今城塚古墳の土壌分析

小西　信夫
高山　　隆

1．目的

史跡今城塚古墳の土壌に含まれる成分とカーボン(炭素、C)の存在状態を示す分布を分析し、調査する。

2．分析対象試料

試料番号	採取場所	土壌の性状
1	地　山	淡黄灰色粘土
2	地　山	黄灰色粘土
3	地　山	青灰色粘土
4	旧表土	黒灰色粘質土
5	旧表土	黒灰色土

試料番号	採取場所	土壌の性状
6	墳丘盛土	暗灰色土
7	墳丘盛土	暗灰色土
8	墳丘盛土	暗灰色土
9	墳丘盛土	黒灰色土
10	墳丘盛土	黒灰色土

3．調査方法

分析機器は、電子線マイクロアナライザー　EPMA-8705（島津製作所製）を使用した。分析対象試料に高速電子線を照射して、試料表面に存在する元素との相互作用により発生する特性X線を波長分散X線分光器で検出、検出波長・強度から構成元素の定性分析あるいは定量分析を行う装置である。電子線を試料上に走査させることができ、走査電子顕微鏡(SEM)としての機能を併せもっている。

今回、構成元素の種類を確認する定性分析と、カーボン(C)について試料表面上での分布状況を確認するマッピング分析及び二次電子線像撮影を行った。

4. 試料の前処理

試料は、50℃にて8時間乾燥ののち、ミクロトームナイフにより試料表面を平滑面に加工したうえ、試料台にカーボンテープと銀ペーストを使用して固定した。さらに試料表面と試料台との間の導電性を図るため、Ｐｔコーティングを20mmイオンスパッタリングでほどこした。

5. 定性分析測定

電子線加速電圧　15ｋＶ　プローブ(電子探針)電流　0.3μＡ

プローブ径(ほぼ分析領域)　100μｍφ

分光結晶　ＬＩＦ、ＰＥＴ、ＲＡＰ、ＰＢＳＴの４結晶（元素Ｂ～Ｕまで定性可能）

各分光結晶により反射強度･分解能が違うため、EPMA-8705のシステムプログラムが判定した。

6. 表面元素分布測定（土壌サンプルマッピング分析）

電子線加速電圧　15ｋＶ　プローブ(電子探針)電流　0.1μＡ

電子ビームスキャン分析　分析領域　約0.1mm×0.1mm（2000倍）

１画素あたりの分析時間　0.002sec（512×512画素／マッピング画面）

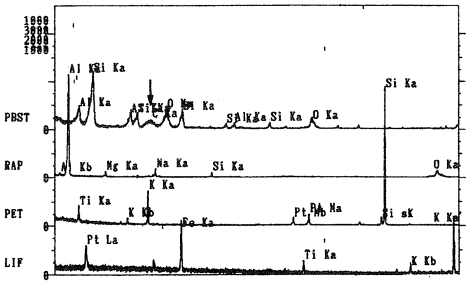
使用分光結晶　ＰＢＳＴ　カーボン(炭素、C)分析波長　4.47nm

7. 分析結果

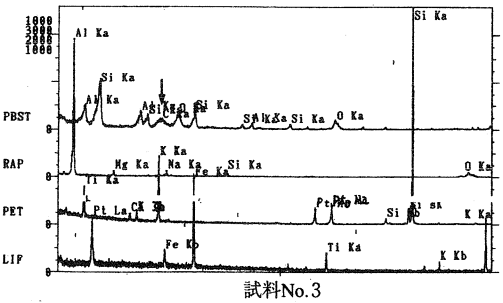
定性分析結果からは、各試料とも粘土鉱物・水酸化鉄・酸化鉄・水酸化アルミニウム・石英・沸石などの鉱物粒子を主成分とし、フミン等の有機物が少々含まれていると推定される。

今回のおもな分析目的であるカーボン(炭素)は、試料1～10のすべてから検出された。X線強度からの推定含有量は、試料1･2･3が１％程度、試料4～10が数％～十数％である。このほか試料3･6については、Si･Oよりも、Alが多く(50％前後)含まれている。

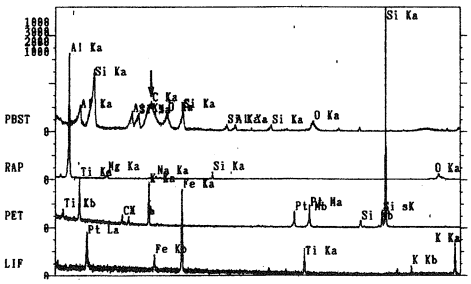
マッピング分析では、乾燥土壌の断面形態とともに、その断面上に存在する特定の元素の分布状態が観察できる。カーボンについて分析した結果、試料1～3については、少量のカーボンが広く分散している状態が観察された。一方試料4～10については、カーボン濃度の高い部分が局在していることが観察された。定性分析で含有量の違いが認められた試料1～3と、試料4～10とにおいて、カーボン元素分布の違いが明らかに認められる。マッピング像に乱れを生じた例もあるが、これは試料の導通接



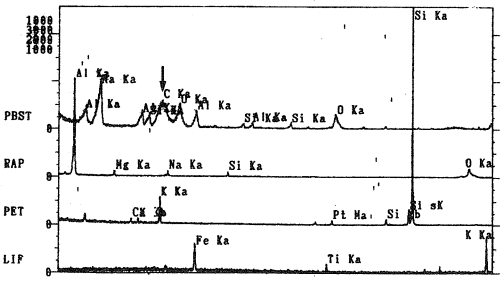
試料No.1



試料No.3



試料No.5



試料No.7

図13 定性分析測定結果

サンプル名	定性分析結果（人工知能解析後）
No. 1−1	(C), O, Na, Mg, Al, Si, K, Si, Ti, Fe,
No. 1−2	(C), O, Na, Mg, Al, Si, K, Si, Ti, Fe,
No. 2	C, O, Na, Mg, Al, Si, K, Ca, Si, Ti, Fe,
No. 3	C, O, Na, Mg, Al, Si, K, Ca, Si, Ti, Fe,
No. 4	(C), O, Na, Mg, Al, Si, K, Si, Ti, Fe,
No. 5	C, O, Na, Mg, Al, Si, K, Ca, Si, Ti, Fe,
No. 6	C, O, Na, Mg, Al, Si, K, Ca, Si, Ti, Fe,
No. 7	C, O, Na, Mg, Al, Si, K, Ca, Si, Ti, Fe,
No. 8	C, O, Mg, Al, Si, K, Si, Ti, Fe,
No. 9	C, O, Mg, Al, Si, K, Si, Ti, Fe,
No. 10−1	C, O, Mg, Al, Si, K, Si, Ti, Fe,
No. 10−2	C, O, Na, Mg, Al, Si, K, Ca, Si, Ti,

今城塚古墳土壌サンプルの定性分析結果

触が不十分なためと判断された。

以上から、試料1～3のカーボンの分布状況は自然の堆積作用の結果と判断されるのに対し、旧表土である試料4・5ではカーボン粒子の浸透もしくは混入、盛土6～10では人為的な混入等の可能性が認められる。

（株式会社ユアサコーポレーション開発本部基盤研究所）

（補　足）

今回、墳丘の鱗状盛土の用土に着目してはじめて土壌分析を試みた。結果は叙上のように地山の黄灰色～青灰色粘土と旧表土・盛土の茶褐色～黒灰色土との間で、カーボンの含有量・分布状況に明らかな違いがあることが示された。肉眼観察による色調の違いが土壌分析のうえでも裏付けられたことになる。旧表土のカーボンは腐葉土や古墳築造時の芝焼き等に由来すると考えられるが、盛土中のカーボンもそうした旧表土由来とみてよいのか、それとも他の要因が想定されるのか、カーボンの存在形態の詳細な比較・分析、資料の蓄積が今後の課題と考えられる。文末ながら分析に尽力いただいた高槻市環境衛生部、株式会社ユアサコーポレーションにお礼申し上げます。（鐘ケ江）

あとがき

平成11年度は76件の発掘調査を実施し、うち注目された4遺跡の調査概要を掲載しました。いずれも本市を代表する遺跡であり、それぞれ遺跡の性格や構造をより詳細に検討していくうえで欠かせない貴重な成果となるものです。とりわけ今城塚古墳の第3次規模確認調査では、後円部裾の直径が約100mとほぼ確定し、古墳築造当時の旧地表の状況についても成果を得ました。また外濠で出土した鉄砲玉は、今城山城に直接関連する遺物としては初出です。調査を重ねるたびに課題や疑問も深まってきますが、将来の整備を見据えて今後も規模確認調査を継続していく計画です。

文化財保護啓発事業として行ったさまざまなイベントには、11年度も多数の参加を得ることができました。なかでも新たにはじめた歴史ウォーク「高槻歴史紀行」は、遺跡等の文化財にくわえて鉄道や大学など現在のまちの景観や成り立ちにもふれ、「歴史の息づくまち」をソフト面から見直そうとする企画です。初回は安満宮山古墳と安満遺跡を軸に実施しました。2回目以降、新池遺跡と今城塚古墳、富田寺内町地域など市域を代表する歴史遺産をめぐるルートを開拓していく予定です。

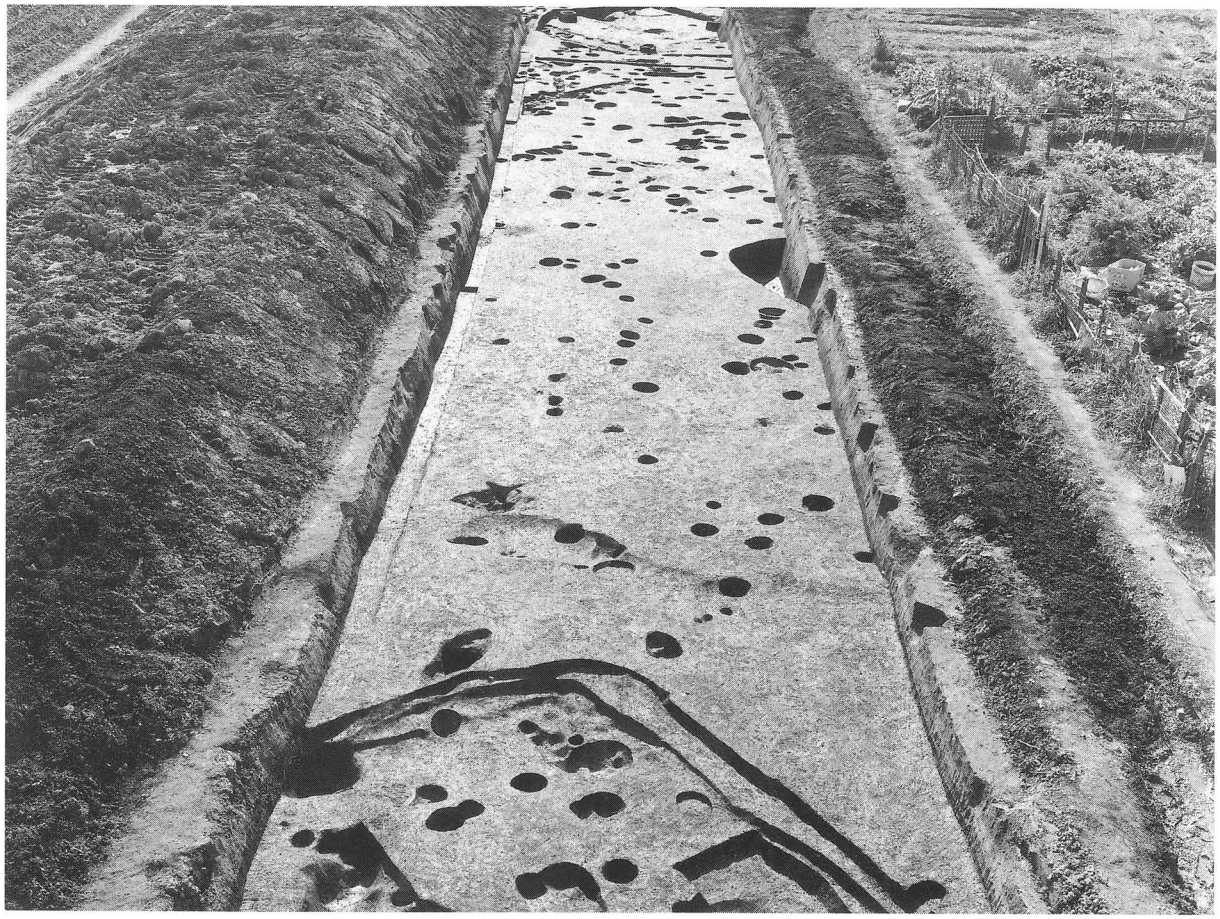
また平成12年4月、文化財の保護・保存の一層の充実を図るため、従前の文書課資料係(市史資料及び古文書所管部分)と社会教育課文化係、埋蔵文化財調査センターが統合され、あらたに文化財課が発足しました。21世紀を迎え、あらたな気持ちで、市民の期待に応えられるよう調査・保存・啓発事業に一層努力していきたいと思っています。

(鐘ケ江)

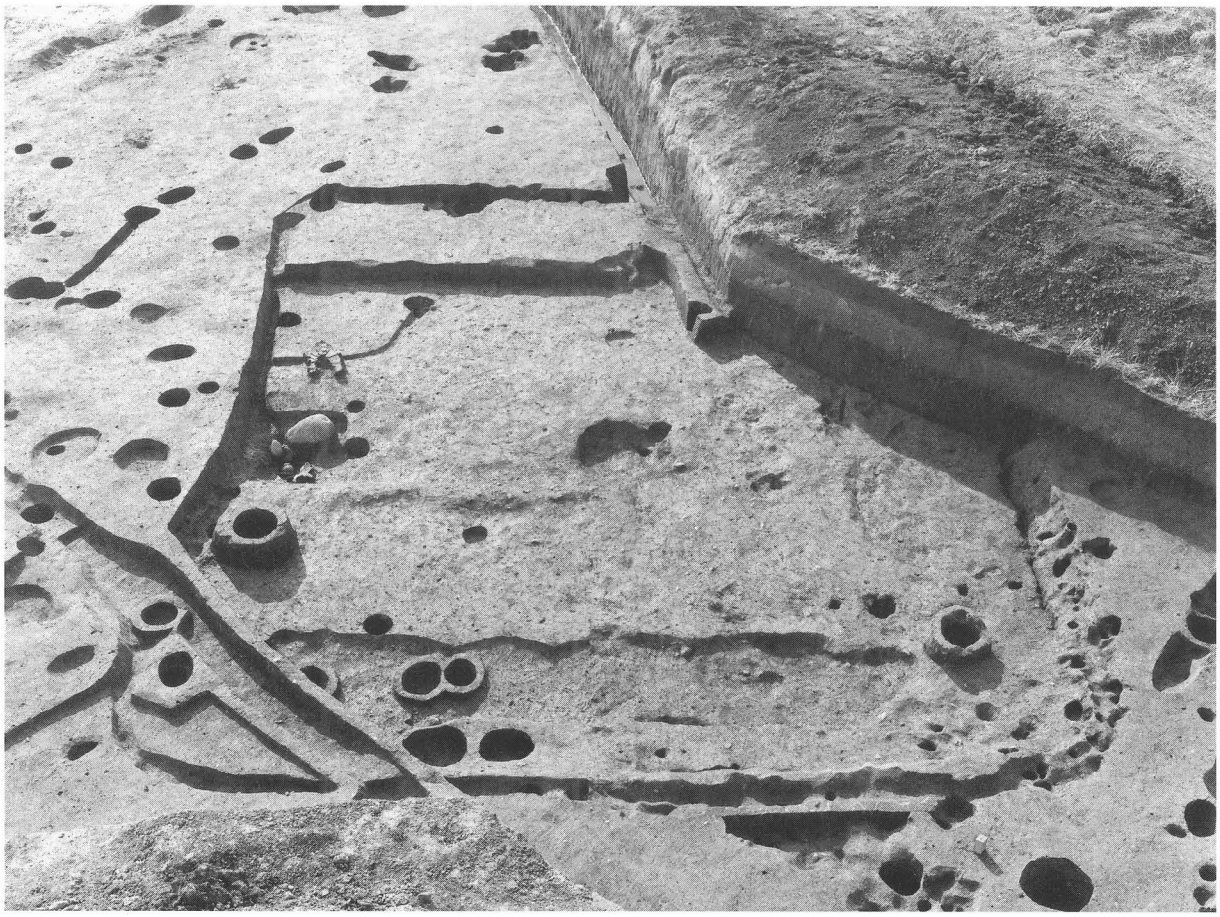
図　　版

図版第1　津之江南遺跡

a. 1999-B調査区　　全景(南側から)



b. 同　上　　調査区北半(北側から)



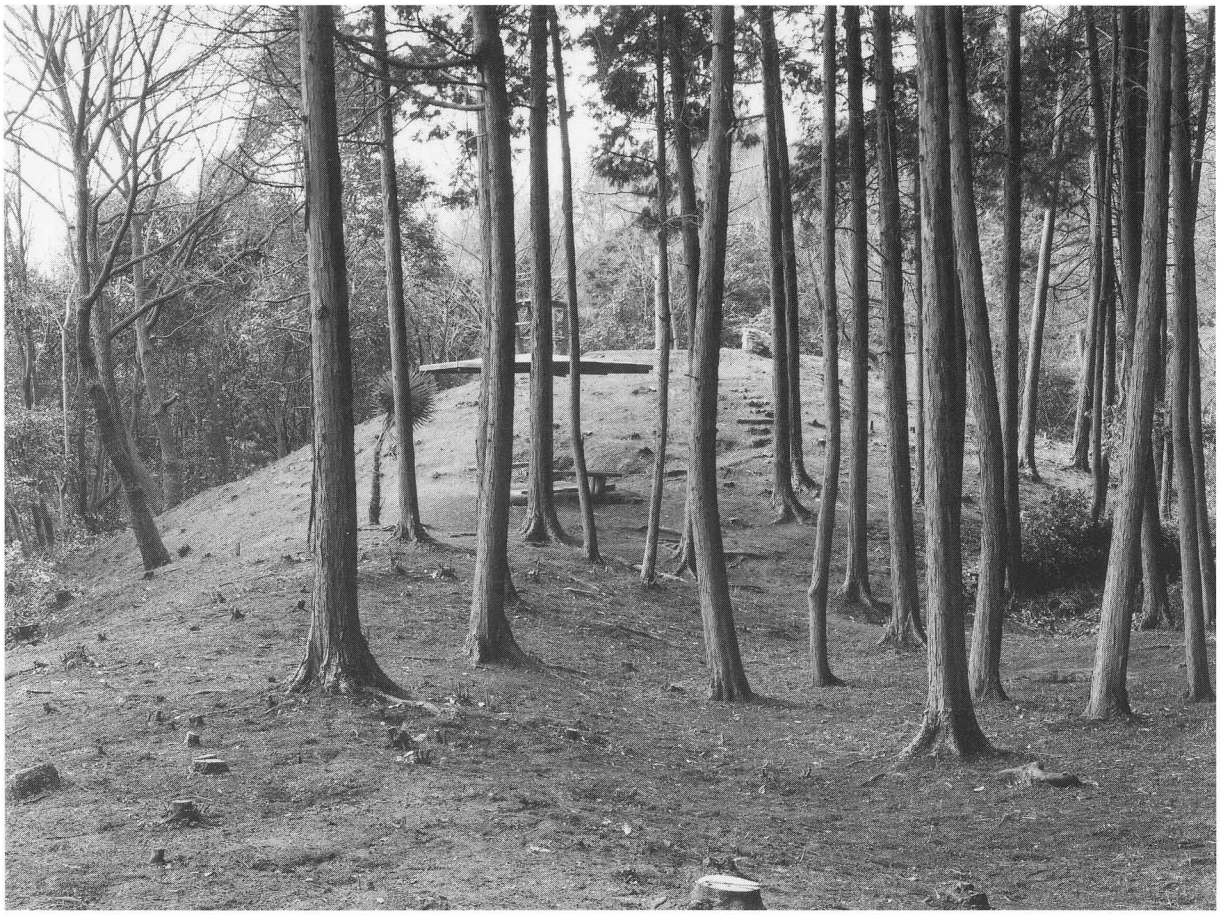
a. 1999-B調査区　　住居1（北東側から）

b. 同　上　　住居4（南東側から）

図版第3　前塚古墳

a. 1999-A調査区　　第3・第4トレンチ(南側から)

b. 同　上　　第5トレンチ 墳丘盛土の状況(南東側から)



a. 萩之庄支群B1号墳　　調査前の状況(北東側から)

b. 萩之庄支群B2号墳　　現況(南側から)

萩之庄支群B1号墳　　石室全景(南側から)

a. 萩之庄支群B1号墳　　石室全景(羨道部側から)

b. 同　上　　石室全景(奥壁側から)

a. 萩之庄支群B1号墳　　玄室奥壁付近 遺物出土状況(南東側から)

b. 萩之庄支群B0号墳　　主体部 遺存状況(南側から)

第3次規模確認調査　　全景(下方、前方部側)

a. 第3次規模確認調査　　墳丘～内濠調査区　　全景(南西側から)

b. 同　上　　外濠調査区　　全景(東側から)

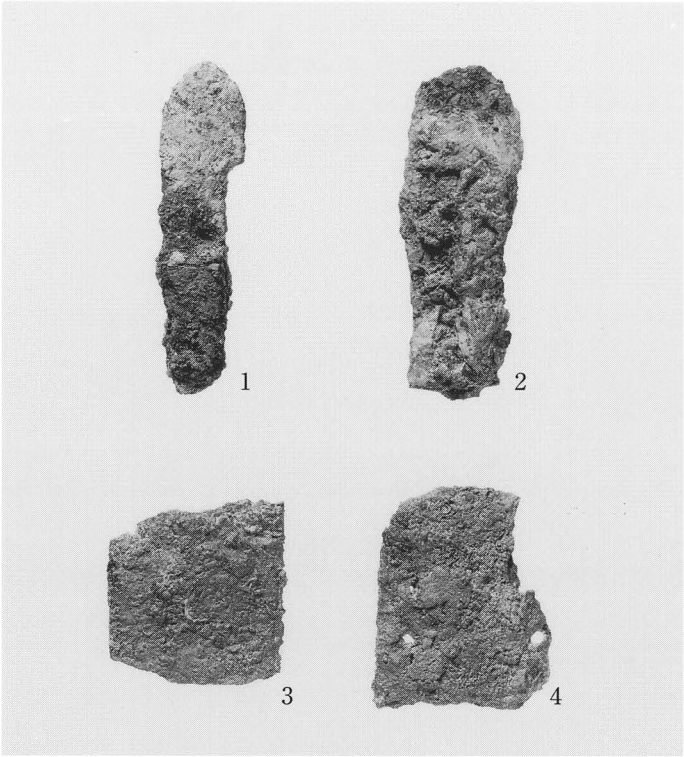
a. 第3次規模確認調査　内堤から墳丘をみる

b. 同左　墳丘から内・外濠をみる

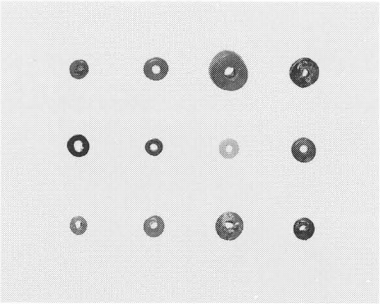
図版第10
史跡今城塚古墳

a. 第3次規模確認調査　　墳丘断割状況(南東側から)

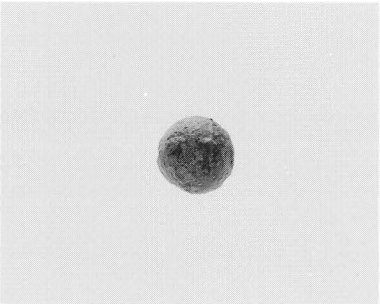
b. 同　上　　円筒埴輪　　(約1/3)



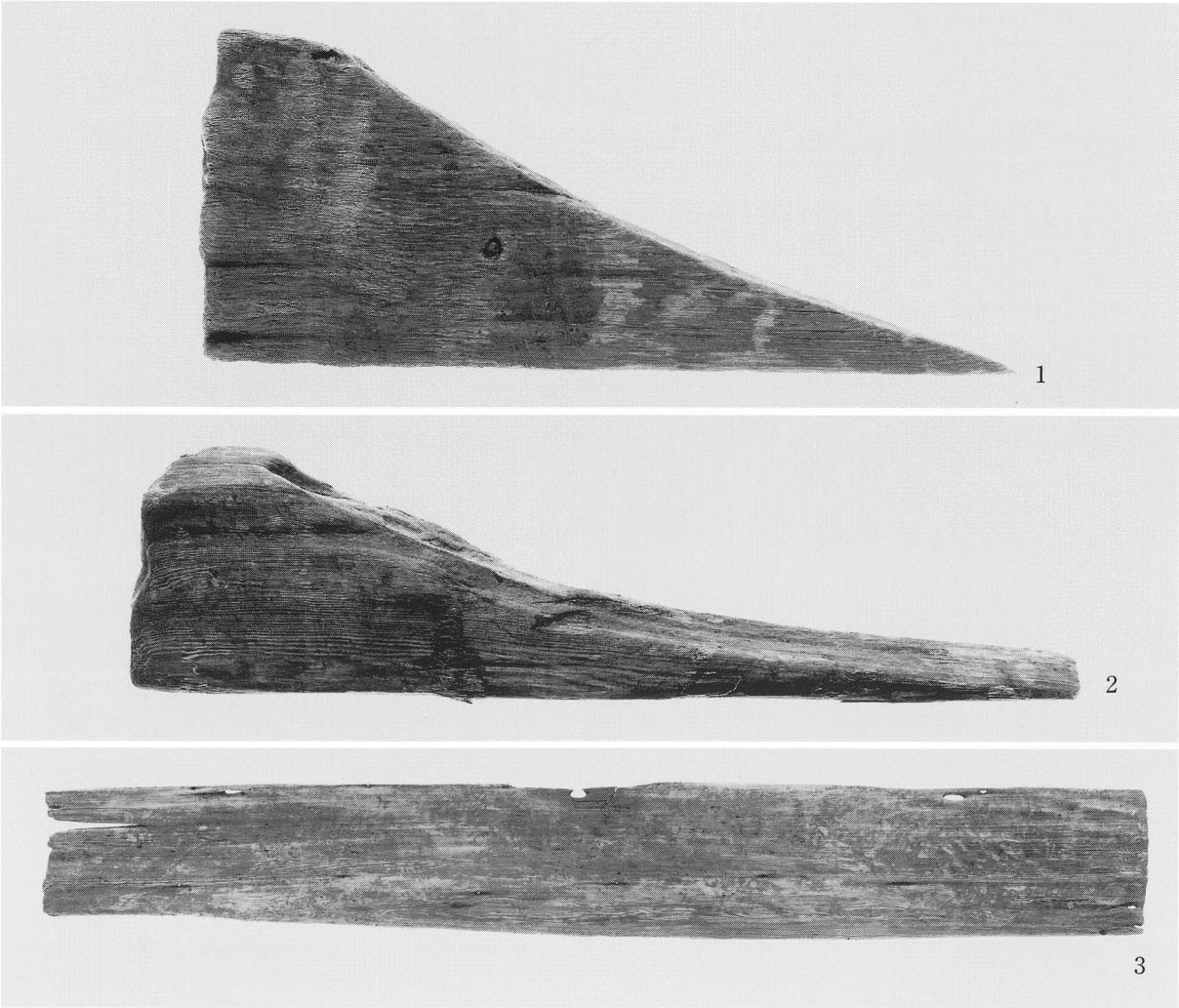
a. 鉄製品　1・2 鏃、3・4 小札　(約1/1)



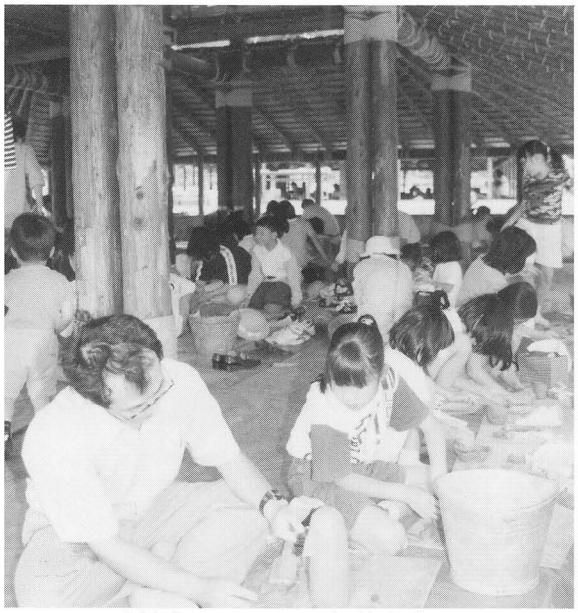
b. ガラス小玉　(約1/1)



c. 鉄砲玉　(約1/1)

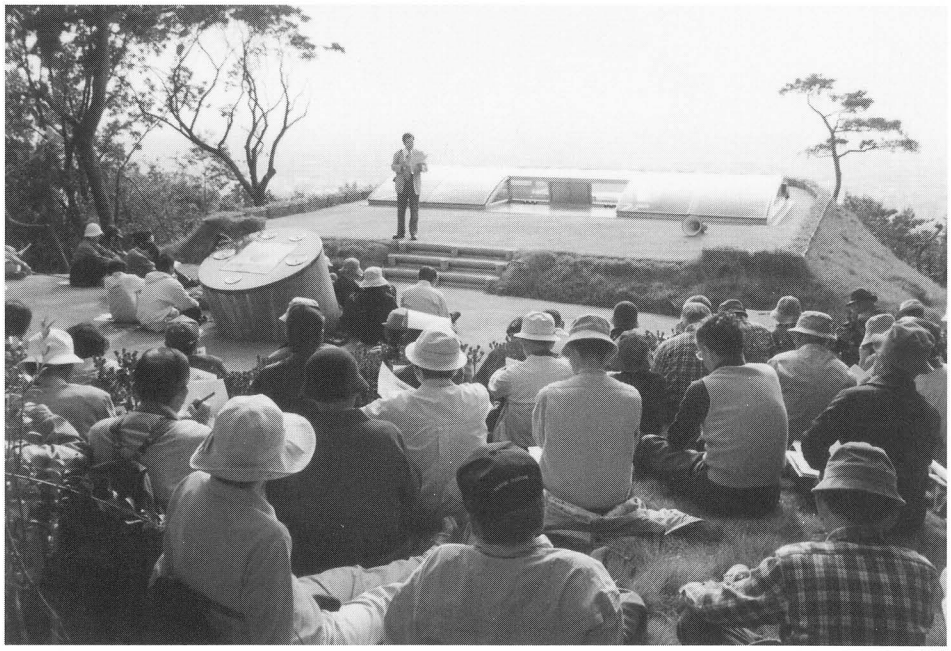


d. 木製品　1・2 楔状木製品、3 板材



a. ハニワづくりとスケッチ・ぬり絵大会　左：復元工房内でのハニワづくり　右：ジャスコシティ高槻での作品展示

b. 小さな展覧会　展示解説（高槻市立生涯学習センター 展示ホール）



c. 高槻歴史紀行ウォーク　安満宮山古墳での現地講演会